

文藝春秋 SPECIAL

BUNGEISHUNJU 2017 冬

エマニュエル・トッド
×本郷和人
「天皇・女性・歴史」



皇室と日本人の 運命

いまこそ考える



激論!
退位は是か非か

永田和宏
天皇・皇后両陛下
「愛の歌」

大日本史

第四回

日米対立を生んだシベリア出兵

第一次世界大戦、それは帝国の崩壊と再編のドラマだった。新興勢力として台頭した日米だったが……



山内昌之
明治大学特任教授・東京大学名誉教授



佐藤 優
作家

山内 第一次世界大戦（一九一四〜一九一八年）は、「大戦」の名にふさわしく、大きく世界を変えた戦争でした。この「大日本史」では、特に日本がこの戦争にいかに関わったのか、そしてその後どのような影響を受けたかに重点を置いて、論じていきたいと思えます。

この第一次大戦を最も巨視的に見るならば、一九世紀までの「帝国」が崩壊したということでしょう。

ドイツ帝国、ロマノフ朝のロシア帝国、ハプスブルク朝のオーストリア・ハンガリー帝国、トルコのオスマン帝国。これらの帝国がすべて崩壊します。ロシア革命が起りニコライ二世が退位、ドイツのヴィルヘルム二世

はオランダに亡命、トルコではやがてケマル・アタチュルクによってトルコ共和国が成立する。また、すこし時期は前だけれど、一九一一年に中国でも辛亥革命で清朝が崩壊しましたね。こうして一九世紀までの旧帝国が次々に崩壊し、世界が変貌していきます。

佐藤 そのなかで、唯一生き残った大帝国が、大英帝国なんですね。

山内 そうです。しかし、その大英帝国にしても、決して無傷では済まなかった。戦後まもなくアイルランド独立戦争がはじまり、南アフリカなどの自治領が独立性を強めていく。さらに後には、それまで支配していたイ

ンド、シンガポール、マレー半島での統治にも綻びをきたすなど、その国力の弱さを露呈し始める。それが太平洋戦争（^{へいとうせん}）に、日本のマレー作戦、プリンス・オブ・ウェールズとレパルスの撃沈、シンガポール陥落となつてあらわれるわけですね。こうした旧帝国勢が崩壊、衰退していくのと対照的に、力を強めていく「帝国」がありました。それが日本とアメリカだったのです。

佐藤 たしかにアメリカは自由主義、共和主義を標榜していますが、外交的には完全に帝国主義国家ですね。米西戦争（一八九八年）を通じて、カリブ海ではプエルトリコやキューバ、太平洋ではフィリピンを獲得し、アジアへの進出も狙っていた。

山内 太平洋国家としても覇権を伸ばしてくるわけですね。そこで、もうひとつの新興の帝国、日本と対峙する運命にあったわけです。つまり、第一次世界大戦を機に起きた世界秩序の再編のなかで、新興の帝国として強化された存在こそ日本であり、アメリカであった。

地中海で戦った日本海軍

佐藤 まさにクリアカットな指摘だと思います。

そこでもうひとつ、いま、日本人が忘れてしている視点と

いうことといえば、当時の日本にとって、世界大戦への参戦という意識は非常に希薄だったということですね。あくまでもヨーロッパの戦争なんですね。それは日本だけでなく、アメリカもそうだった。

たとえば一九三一年に平凡社が出した全二十八巻の『大百科事典』をみてみましょう。これは日本での最初の本格的な百科事典ですが、この中に「日独戦争」という項目があります。じつはこれが当時の第一次大戦のことなんです。つまり、青島を占領したり、ドイツ領だった南洋諸島を押さえたり、といった地域限定の参戦意識なんですね。

私たちはどうしてもその後の日独伊三国軍事同盟、そして第二次大戦という流れから、近代史を逆さ読みしてしまうのですが、当時の日本人の認識はどういうものだったか、押さえておく必要があるでしょう。

山内 この戦争への関与と評価のしかたは、陸軍と海軍でかなり異なるんですね。陸軍は、イギリスとともに、ドイツの東洋艦隊の拠点だった山東省の青島要塞を攻略する。一方、海軍は南洋諸島だけではなく、当時、地中海まで艦隊を派遣しているんですね。

開戦から三年経った一九一七年二月、日本は日英同盟に基づき、イギリスの要請から九隻の艦隊を派遣しまし

た。巡洋艦一隻と駆逐艦八隻から成る第一特務艦隊です。のちに駆逐艦は四隻増派されます。マルタ島を拠点として、ドイツの無制限潜水艦作戦に対抗し、連合国の輸送船を護衛したのです。マルタ島とエジプトのアレキサンドリアをつなぐ海上交通路の護衛任務。これを現地では「ビッグコンボイ」と呼んだようです。この護送船団の中心にいたのが日本海軍だったわけです。

これはほとんど知られていませんが、非常に重要な事実です。この地中海派遣によって、戦後のパリ講和会議などでの発言力を増すことにもなったからです。

佐藤 陸軍も英仏露からヨーロッパ戦線への派兵を再三要請されたのですが、いずれも拒否していますね。

山内 その通りです。ところが、日本海軍は地中海で貴重な経験をしたのに、その経験を活かすことができなかつたのです。私が問題だと思うのは、一つは、潜水艦による無差別の通商破壊戦のダメージの重要性を学べなかつたことです。シーレーンの切断による商船や輸送船の轟沈、海上封鎖を試みる潜水艦の脅威。新たな海軍戦略の技術的必要性や潜水艦同士の水中戦術を發展させなかつた。もう一つは武装商船。マーチャントネイビーという言葉もあります。この武装商船のちに太平洋戦争でアメリカから死活の重要性を思い知らされる。

などになる情報組織)につながっていく。

当時、日本の陸軍参謀本部はドイツ寄りであると見たイギリス側は、その親独感情をひっくり返そうとした。実際、この本によって日本のエリート層の対独感情はだいぶ変わったと池田は記しています。

山内 似たようなことを、ドイツは中東で行っています。「イスラムの味方は誰か」と投げかけるようなプロパガンダ本やパンフレットがオスマン帝国内外のムスリムに頒布されよく流布された。そこには、ヴェイルヘルム二世とオスマンのアブデュルハミト二世が一緒に写っている写真も載せられ、ドイツこそがイスラムの味方だと強調されている。イランからアフガン、さらにはインドに攻勢をかけようとする軍人ニードマイヤーは、一九一五年にアフガニスタンに赴き、国王大守ハビーブツラー・ハーンに、オスマン帝国のスルタン・メフメト五世がシハードを宣言したと伝え、英国への宣戦布告を促しています。イランで部族工作をおこない「ドイツのロレンス」とも呼ばれた工作員ワスマスなどが活躍したのもこの時期です。

佐藤 バーバラ・タックマンの『決定的瞬間』でも、ドイツが「日本やメキシコは親独だ」というプロパガンダをおこない、アメリカを揺さぶろうとする動きが描か

佐藤 まさにロジステイクスの問題ですね。これは後々の昭和の悲劇にもつながります。

英独プロパガンダ戦争

佐藤 第一次大戦が「世界大戦」であるゆえんは、主要な戦場やメインプレイヤーはヨーロッパでありながら、まさに世界を巻き込もうとした戦争だったことです。それが端的にあらわれているのが、インテリジェンス、プロパガンダの本格化ですね。

ここに興味深い本があります。第一次大戦中の一九一六年に、丸善から刊行された『是でも武士か』。副題は「欧州戦争の原因及び行動に関する研究資料の集録」となっていて、英語、日本語が半分ずつで、翻訳者はあの柳田国男なのですが、本には明示されていません。この本は、中立国ベルギーへの侵略や、市民の虐殺、Uボートによる客船への攻撃などドイツの所業をひとつひとつ挙げて、「これでも武士か」と非難する書物なんです。著者はロバートソン・スコットという正体不明の人物なのですが、池田徳眞『プロパガンダ戦史』によると、これはイギリスの秘密情報部の工作員だったという。スコットの来歴を調べたところ、クルーハウス(後にMI6

れていますね。つまり、ヨーロッパ以外の日本、そして何よりアメリカをいかに、味方につけ、積極的に戦争参加させるかが非常に重要な問題だったわけです。

山内 イギリス、ドイツ、あるいはロシアという大国はヨーロッパ域内の勢力均衡の争いですが、アメリカや日本はその外側にある。つまり、ヨーロッパの争いを解決するために、非ヨーロッパ国家の参戦が不可欠になったのが第一次大戦という言い方もできますね。

日本国内の状況を補足すると、第一次大戦の前後は、国内政治の面でも大きな転機を迎えた時期でした。長い間、帝国政府の権力を握ってきたのは、政友会の系譜です。立憲政治、議院制政党政治という御旗のもと、伊藤博文、西園寺公望、原敬という流れが生まれました。それに加え、帝国陸海軍、官僚たちで構成されていたのが、従来の政治システムだった。それに対して、一九一四年、立憲同志会などによる第二次大隈重信内閣が成立する。政権交代です。そして、この新政府が、ドイツに対して宣戦布告し、第一次大戦に参入していくわけです。

しかし、この内閣は外交においては成功したとは言いがたかった。それが対華二十一条の要求ですね。満州の権益期間の延長を図り、中国の内政に関して主権を無視するような要求を繰り出した。これも後に禍根を残す

ことになります。

はじめは国際協調として

山内 ともあれ、第一次大戦の結果として、日本は赤道以北の南洋諸島の委任統治国となるとともに、一時的にせよ、山東半島・青島のドイツ権益の継承を英仏露に認めさせ、アジア、太平洋地域において、大国といつていいポジションを占めるようになります。

そこで、やはり太平洋、アジアに進出してきたアメリカと本格的に対峙することになる。これまでの日本史では、一九一九年のヴェルサイユ会議、一九二二年のワシントン会議が強調されてきましたが、ここではロシアに注目したいと思います。第一次大戦からロシア革命、そしてシベリア出兵という流れは、実は日米関係にもきわめて重要な影響を与えたからです。

佐藤 非常に面白い着眼だと思えます。もともと日露戦争以降、日本とロシアの関係は、実は相当良好なものだったといえます。日露戦争のあと、日本はロシアと日露協約を第一次（一九〇七年）から第四次（一九一六年）まで行い、内蒙古や外蒙古、極東における権益の確認をしますが、それは準同盟というレベルまで達していた。

シベリア出兵を熱心に推進した本野一郎外務大臣の言葉を借りれば「わが国、帝国が世界の大国、列強に伍して伍伴となるか否か」という出来事だった。列強のメンバーとして新しい世界秩序を守る、という意味合いが、最初のシベリア出兵にはあった。

ところが、英仏が一九一九年、アメリカも一九二〇年に撤兵するなか、日本だけが単独で一九二二年まで出兵を続行します。これが国際的な孤立、ことにアメリカとの大きな対立の一步となってしまうのです。

佐藤 後から見ると、シベリアには総計七万三千人を派遣し、約三千人の死者と二万人の負傷者を出した。これだけの大事業でありながら、日本近代史のなかで、その意味付けがあまり明確にされていないようにも思えます。しかし、当時の日本にとって、これは領土、利権、軍事につながる重要な問題だった。

山内 樺太、満州、シベリア。これらの場所では鉄道、石油という利権があり、それがアメリカとの対立を深めていったのです。

なかでも大きかったのは、エネルギー問題でしょう。第一次大戦はいくつもの世界史の転換点だったのですが、そのひとつがエネルギー革命なのです。つまり、軍艦や汽船もそれまでの石炭から石油への切り替えが決定

それが一変するのが、ロシア革命（一九一七年）です。

山内 ソビエト新政府ができ、日露協約は破棄されるばかりか、「革命の輸出」を恐れた英仏などによる対ソ干渉が始まりますね。

佐藤 そのきっかけはチェコ軍団の蜂起なんですね。第一次大戦中、ロシアはオーストリア＝ハンガリー帝国軍からチェコ人とスロバキア人の捕虜を集めて、軍団を編成します。ロシア革命時にはその数が数万人に及んだといわれますが、このチェコ軍団司令官が、のちのチェコスロバキア建国の父トマーシュ・マサリクでした。

山内 そのチェコ軍団が一九一八年五月に、ウラル地方のチェリヤビンスク駅で、ハンガリー兵と乱闘騒ぎを起す。ハンガリー兵が鉄片を投げたことが原因ともいわれますが、事件後、わずか三ヶ月でチェコ軍団はヴォルガ川以東のシベリア鉄道沿線を占領するのです。

英仏伊は、このチェコ軍団救援のための出兵を日米に強く求めます。そこでアメリカのウイルソン大統領による共同出兵の提唱に応じる形で、日本も東部シベリアへ出ることになった。それがシベリア出兵です。つまり、はじめは連合国との協調という側面があったわけですが、この第一次大戦、シベリア出兵という流れで重要なのは、日本が大国の仲間入りを果たしたことです。当時

的となった。

佐藤 そもそも飛行機は石油でないと飛べませんし、戦艦においても熱量は倍増し、補給も格段に容易になりました。しかし、問題はその石油をどうやって確保するかですね。日本国内では石炭は採れても、石油は少量しか産出しない。

山内 これは後年、一九四〇年時点の話ですが、日本の原油生産は秋田沖やサハリン（樺太）の一部などで三十三万キロリットル。その時点での石油消費量は四百六十万キロリットル。すでに輸入依存度は九二％に達しており、そのうちの八〇％は仮想敵国のアメリカに依存していたわけです。

佐藤 客観的に見れば、日本は絶対にアメリカとは戦争できない関係だったということです。

山内 このエネルギー確保の重要性をはじめて強調した指導者がウィンストン・チャーチルでした。一九二二年、第一次大戦が始まる二年前に、彼は海軍大臣として、こういう発言をしているんです。「一つだけの国、一つだけのルート、一つだけの油田、こうしたものにわれわれは依存してはならない」と。要は、多様なルートで確保することが大事だということです。

佐藤 だからこのちのナチスドイツは、プロイエンシュテ

イ油田を押さえるためにルーマニアに侵攻したんですね。イギリスと違って海に出られないドイツは、石油を確保するのに陸で行くしかない。そこで、ルーマニア、さらには、当時最大の産出量を誇ったアゼルバイジャンのバクー油田を押さえたわけです。

山内 日本海軍は日露戦争の終わりごろから、石炭から重油へとエネルギーを切り替えつつありました。では、どこに石油の供給源を求めるか。

そこで目を向けたのがサハリンです。一九一九年、シベリア出兵時に、日本はサガレン州(当時の陸海軍の樺太の呼称)派遣軍を送りました。余談ですが、これには太平洋戦争終戦時の阿南惟幾陸相が参謀を務めていました。この目的は実質的には燃料の確保です。軍は久原鉱業、三菱鉱業、日本石油など国内の石油会社五社で北辰会、北樺太石油という株式会社を設立し、オハという油田の開発を始める。ところが、このオハに手を付けたことで、アメリカとぶつかることになる。この北サハリンの石油開発には、英米の企業も参入を図るのですが、サガレン州派遣軍に阻まれてしまうのです。

佐藤 日本が北サハリンを保障占領するのは、尼港事件によるものです。尼港、すなわちニコラエフスクはアムール川の河口の都市ですが、ここに駐留していた日

くして利益供与はないとはねつけた。これはポーツマス会談のセルゲイ・ウィツテを思わせませぬ。

佐藤 ただ、面白いのは、ソビエトは日本と直接ぶつからないように一九二〇年からわずか二年間ではありましたが、極東共和国という緩衝(かんしゆ)国家を作りましたね。

山内 もともと日ソともに赤軍と日本の派遣軍が直接ぶつかることは想定していなかったのですが、この極東共和国の設置の意味は重要ですね。ときにはモスクワの統制を離れて、日本と独自に条約や協定を結ぼうとしますね。ところが、モスクワはそれは許さなかった。人事で呼び戻したり、日本と通牒した嫌疑で極東共和国の指導者を肅清したりしています。

ここで重要なのは、ソ連にとつても、この極東地域が地政学的に絶対に必要だということが見えていた、ということでしょう。油田の問題と並んでもうひとつ、シーレーンの問題です。樺太とシベリアの間にある間宮海峡の重要性をあらためて認識したわけです。

佐藤 この海をめぐるロシアの地政学的な問題意識は、いまの北方領土問題にもつながっていますね。

山内 第一次大戦が終わって、東アジアから西太平洋を巡って日本とアメリカが対立せざるをえない構図になったことがすぐに明らかになります。そして一九二二年

本軍守備隊と居留民が現地のバルチザン部隊に全員殺されたという悲惨な事件です。その結果、北サハリンを占領した日本軍に、アメリカは嚴重抗議するとともに、日本は領土的野心があるのではという深い疑義を抱く。

山内 そう。少し前後しますが、アメリカとは鉄道をめぐる利権でも対立しますね。当時アメリカは南満州鉄道、中東(中国東北)鉄道、シベリア鉄道の一部で事業を拡大しようとしていました。その主導者が、ユニオン・パシフィック鉄道のエドワード・ヘンリー・ハリマンです。

佐藤 ハリマンは日露戦争時にジェイコブ・シフとともに戦時公債を引き受けた人物でもありますね。南満州鉄道の共同経営を提案し、東清鉄道の日米共同経営を盛り込んだ桂・ハリマン協定(一九〇五年)も結んだのですが、小村寿太郎の猛反対によって、破棄されてしまう。いずれにしても、日本のシベリア出兵は、国際協調という大義がなくなつた後も、石油や領土などの利害のために続けざるを得なかった。しかし、結果をみると、これは明らかに失敗でした。結局、日本は何の権益も得ないまま、シベリアから無条件で撤兵します。いったい何のための出兵だったのかということになりますね。

山内 撤兵の条件をめぐっては、ソ連との交渉を試みたのですが、ボリシェヴィキ政権の意志は固く、撤兵のためのワシントン会議に至るのですが、このシベリア出兵は、そのさなかに、日米間の齟齬(そご)、対立を顕在化させてしまった。またワシントン体制自体にも大きな問題がありました。このときに結ばれたのは、日英同盟の廃棄を伴う日米英仏の四カ国条約であり、中国をめぐる九カ国条約だったのですが、イギリスやフランスは太平洋に死活的な利益をもっており、しかもアジアにおける影響力を弱めていた。

佐藤 つまり当事者能力に乏しい国を入れた多国間条約にしてしまったために、うまく機能しなかった。

山内 その通りです。このとき必要だったのは、ちょうどいまの日米同盟のような、二国間の利害を調整するシステムだった。それを作り得なかったことに歯がゆさを感じますね。

技術の遅れが招いた尼港事件

山内 ひとつ、第一次大戦後の大変化と関連して、少し触れておきたいエピソードが、先にも出てきた尼港事件なんです。第一次大戦は兵器、軍事技術の面でも大きな転換点になりました。しかし、日本はこうした激変を実戦で学ばなかった分、日本陸軍の機械化、装甲化は

著しく遅れる。この技術的な知識の遅れが招いた悲劇のひとつが、シベリアでのニコラエフスク事件¹、尼港事件²だとも言えます。

最近の麻田雅文氏の『シベリア出兵 近代日本の忘れられた七年戦争』(中公新書)がリアルに書いていますが、尼港は周辺が結氷して陸の孤島になってしまっている。そこには二百六十人の陸軍兵士と八十人ほどの海軍通信兵、それと若干の民間人がいた。そこで、旭川の第七師団に架電されて、小樽港に援助隊が集結するんです。でも、もう和平となったというので、援助隊は旭川に戻ってしまう。このとき、直線距離ではウラジオストーク派遣軍のほうが近いのですが、当時のウラジオストーク派遣軍には飛行機も自動車もなかったから、救援に行けなかったのです。しかし、もしも第一次大戦の経験を生んでいれば、この時点で飛行機や自動車によって機動的に対処できたのではないか。さらに言えば、日本特有の精神主義的な戦闘法ではなく、もっと合理的な、機械的な戦術へも切り替えられたのではないか。実際、陸軍のスケールの大きな指導者となる宇垣一成はそうした考えを当時述べていますね。彼は第一次大戦後の軍近代化の遅れに相当な危機感をもっていた。

佐藤 やはり現場で実際に経験していないと、皮膚感

ーとともにボスニアのサラエボで殺害されたところから始まります。しかし、それがなぜ欧州、そしてロシアを巻き込むことになったのかという背景はあまり知られていない。当時、オーストリア¹、ハンガリー²帝国は台頭するスラブ民族運動に頭を悩ませていました。隣のスラブ人国家セルビアでは、セルビア人の多いボスニア・ヘルツェゴビナなどの帝国南西部を吸収せよ、という大セルビア主義が盛んになっていたのでした。

佐藤 そして、汎スラブ主義の高まりの背後には、スラブ系の大帝ロシアがいる、という構図ですね。

山内 バルカン半島に「欧州の火薬庫」と呼ばれるほどの民族的緊張が高まる中で、フランス・フェルディナントはセルビア人のテロリストに暗殺されるのですが、興味深いのはこの皇太子はスラブに対して宥和的な考えを持ち、スラブ人を含めた多民族国家としての帝国の統合に強い関心を持っていたことです。スラブ系の多い地域の民族的な自治などにも一定の理解を示していた。

佐藤 そもそも妻のゾフィーはチェコ人ですからね。ドイツ系のハプスブルク家の後継者なのに、スラブ系を配偶者に迎えたのです。

山内 ゴフィーはチェコの伯爵家の家系なのですが、当時の老帝フランツ・ヨーゼフは「その血筋では我々と

覚としてわからないかもしれないですね。日露戦争はすでに十五年くらい前のことで、それ以降の兵器の進化、戦術の高速化などには対応できなかった。

山内 日本軍の機械化はその後あまり進まず、一九三一年の満州事変でもまだ十分に自動車を保有していないくて、鮎川義介率いる日産コンツェルンを満州国に移して現地生産をしたほどです。

皇太子暗殺とテロの論理

佐藤 ここで少し日本を離れて、現代につながる世界的文脈で、第一次大戦後をみてみたいと思います。そこで重要なのは、旧帝国が崩壊して新しいタイプの国家が誕生したことだと思います。

そのひとつがソビエト連邦というイデオロギー国家の誕生。もうひとつが中東欧の再編。ウィルソンの民族自決主義が実際に適用されたという点で、それ以前にはない形での国家形成が行われた。

山内 もともと第一次大戦の発端には、東ヨーロッパにおけるスラブ主義の問題が背景にありますね。

世界史の教科書などでは、オーストリア¹、ハンガリー²帝国のフランス・フェルディナント皇太子が妻のゾフィー

は釣り合わない」と最初、反対したほどです。実際、結婚は認めるけれど、ゾフィーに皇太子妃という資格は与えないし、子どもにも皇位継承権を認めないという条件付きの結婚でした。

ではなぜスラブ民族に宥和的なフランス・フェルディナントがテロの対象となったのか。テロリストたちの背後にいたのは、黒手組¹というセルビアの過激派でした。彼らからすると、むしろスラブに友好的、宥和的な君主は都合が悪いのです。むしろセルビア民族の利害を優先し、セルビア人、スラブ主義を弾圧するような状況こそ、セルビア・ナショナリズムは高揚する――。そこで皇太子暗殺を行うことで、汎スラブ主義、オーストリア主義を刺激して、対立の激化を狙ったわけですね。

これは現代にも通じる教訓ですね。つまりテロリストの論理です。あるグループの主張に対して、それを許容する、もしくは穏健な立場をとればテロのターゲットにはならないかという点、そうではなくて、むしろ穏健な立場の人間を叩くことで対立を煽り立てていくという構図なのです。

佐藤 中東欧での民族に関する議論は、いまでも民族問題を考える上で重要だと思えますね。ウィルソン流の民族自決、すなわち民族ごとに領土を分割し、それぞ

れ別の国家となるべきだ、という考えとは別に、多民族の宥和という思想はいろいろな形で考えられてきた。たとえば一七世紀チェコの神学者ヤン・コメンスキーは、今では教育学の分野で高い評価をされていますが、国際連合に通じるような構想をすでに持っていた。

これもチェコの人ですが、一八四八年のスラブ民族会議で議長をつとめた歴史家で政治家でもあったパラツキーは、自分たちチェコ人の脅威はドイツとロシアだ、というんです。ロシアはスラブの一員ではあるが、アジア的な専制を行っている。この二つから守るためには、スラブの相互交流を保障するオーストリア皇帝の下に結集する、と。つまり、ここでは帝国というモデルが多民族の宥和を実現しうるものとして提示されていたわけです。

山内 いわゆるパラツキー畫簡の主旨ですね。他方、ウィルソンの民族自決主義は、不思議にも、スターリンの国家論と同じような結論に落ち着くんですね。スターリンの連邦国家のモデルは、民族を領土的に分割し、自立させるといふものでした。すなわち、国民国家を人為的につくり、承認する原理となっていく。

それに対して、オットー・バウアーやカール・レンナーといったオーストリア・マルクス主義者たちは、独自の存在に、モーゼス・ヘスという人物がいたことです。彼はドイツ社会主義の祖であると同時に、政治的シオニズムの祖でもあった。このシオニズムもまた、「世俗化されたメシア主義」なんです。つまりマルクスやヘスたちの思想が、一方はロシアに流れてロシア革命を起し、七十年間世界を混乱させた。もう一方は、ヨルダン川へ行きイスラエルという国家を生み、いまも超大国アメリカに影響を与えるような国家になった。

山内 ソ連とイスラエル、思想が国家を作ったという代表的なケースですね。イスラエル建国は第二次大戦後だけれど、一九一八年の大戦終結以後、オスマン帝国が解体してパレスチナがイギリスの委任統治領となり、そこにユダヤ人の移民が増えていきます。

佐藤 この世俗化されたメシア主義は、啓蒙主義的な合理主義とは異なる原理なんです。それが現実社会を動かしていくのが、第一次大戦後の世界だといえると思います。そこでもうひとつ見逃せないのが、第一次大戦後のヨーロッパの思想なんです。大量殺戮と大量破壊を目の当たりにして、人間の理性の帰結、科学技術などの進歩の結果がこれか、という大変な衝撃を受ける。

山内 啓蒙の限界、理性への不信が表出されてくるわ

の民族理論や対立国家理論をもっていました。その考えの基盤は、領土、土地と民族を分離して、あくまでも個人の存在を基調に、市民権などを自治として与えるというものです。ある意味では共生の原理といえるような側面がある。これも、現代につながる問題です。

ヨーロッパ思想に与えた衝撃

佐藤 もうひとつ、第一次大戦の影響で無視できないのは、思想との深いつながりですね。

先ほどソ連というイデオロギー国家が成立したと述べましたが、この底流にあるものは世俗化されたメシア（救世主）主義なんです。救世主信仰とは、ユダヤ教、キリスト教の基本的な考えのひとつで、やがて終末がやってくるが、信仰を持っている者たちはメシアが救ってくれ、平和の王国を実現する、というものです。これはマルクス主義にも濃厚に反映している。一八四〇年代のマルクスとエンゲルスは『経済学・哲学草稿』『ドイツ・イデオロギー』などで、いわばメシアとしてのプロレタリアートを発見したわけです。

そこで興味深いのは、この時期、マルクス、エンゲルスとともにドイツの屋根裏部屋で議論を重ねてきた、

佐藤 はい。その結果、これまでの常識を疑う、あるいは根本から見直そうという理論が、様々な分野で登場する。たとえば神学であれば、カール・バルトの弁証法神学。あれは徹底した宗教批判なんです。宗教というのは、結局、人間の何かしらの願望から出発している、人間の神に対する反逆であると言っている。哲学であれば、ハイデガー、ウイットゲンシュタインが出てくる。さらには数学の分野でも、「数学は自己の無矛盾性を証明できない」とするゲーデルの不完全性定理が提唱され、量子力学では「物質の位置と運動量を同時に確定することはできない」としたハイゼンベルクの不確定性原理が登場します。これらの背景には、第一次大戦という、これまでの世界を一変させるような衝撃があったのではないかと、というのが私の見方なんです。

ところが、ここでもアメリカと日本は「外側」なんです。戦勝国でもあり、自分の国土で血を流していない。だからアメリカでは、第一次大戦は物量と新技術の勝利といった次元で捉えられてしまった。アメリカだけ啓蒙と合理化の時代が続いてしまったんです。その先送りのツケがさまざまな形で噴き出しているのが、現代のアメリカではないでしょうか。